

APT相場は需要弱いも中国価格の下支えで現状維持か

タングステンの中間原料・APTの国際相場（バラタングステン酸アンモニウム、ヨーロッパ・アメリカ）は、今年4月まで310ドル/Mtu前後で推移していたが、4月下旬に反発すると6月には350ドル近くまで上昇した。以降は再び調整に転じたものの、足元では335ドルと高値を維持している。タングステンの世界需要は、主用途の超硬工具が20年後半からコロナ禍による低迷から復調し、22年前半まで堅調に推移してきた。だが、年後半からは半導体不足による自動車の減産や中国経済の減速などで需要が再び縮小に転じた。23年以降は自動車生産が供給制約の解消に伴い復調に向かったものの、中国経済は依然として停滞が続いており、需要の本格回復には時間を要するとの見方が強い。タングステンの中間原料・合金鉄・スクラップを長らく取り扱ってきたNIC Resourcesの**西野元樹社長**に今年10~12月の相場見通しを寄稿してもらった。

APT相場は6月に下落も7月末を底に再び上昇

タングステンの中間原料であるAPT（CIFロッテルダム/バルティモア）の国際相場は、今年4月末から反転し、6月中旬には335~360ドル/Mtuまで上昇した。その後下落に転じたが、7月末の320~340ドルを底に、9月以降も325~345ドルと高値を維持している。

新型コロナウイルス感染拡大により、20年7月までAPTの相場は200ドル前後で低迷していたが、コロナ禍からの需要回復や、在庫積み増しによる原料購入量の増加を背景に相場は上昇。22年4月には約4年ぶりに350ドルを回復した。その後の2年間は緩やかな減少傾向が続いていたが、23年4月末に300~325ドルから急激な上昇に転じた。

中国内相場は精鉱・APT安値販売せず高値を維持

これらの動きの背景には、タングステン精鉱供給の約8割を占める中国内での精鉱相場の急騰と下落、その後も続く高値維持がある。環境査察による精鉱生産の落ち込みか

ら、今年4月末に精鉱相場が急上昇。年初には12万元/t前後だった価格が、5月中旬には15.7万元まで上昇した。だが、6月初旬に環境査察が終了し供給が回復。7月末には精鉱相場が13万元を下回る水準まで下落した。その後、相場は持ち直し、9月下旬時点で14万元の高値を維持している。

中国内需要は超硬工具を中心に落ち込んでいるが、今年1~8月の精鉱生産量は41,740tで、前年同期比12.82%減少している。供給面において精鉱やAPTの安値売りの動きは見られず、中国内のAPT価格も20.5万元/t（約326.5ドル/Mtu）と高値を維持している。

西側需要は低迷続き中国のAPT・YTO輸出も低調

一方、日本を含む西側諸国のタングステン需要は引き続き低調である。23年の中国からのAPT輸出量は1,925t（W純分）で前年比38.7%減少しているが、今年1~7月では1,111tとなり、月平均では前年並みの水準にある。YTOの輸出量も23年の4,009t（同）に対し、今1~7月は1,981tとなり、月平均ではさらに15%減少している。西側の超硬工具産業からの需要回復が遅れていることが伺える。

年後半に中国および西側の需要が大きく回復する可能性は低いだが、中国国内での精鉱およびAPT相場の高値維持は続くと考えられる。そのため、需要面は引き続き低調ではあるものの、APT相場が大きく下落することは考えにくく、10~12月のAPT国際相場は現状維持か、動きがあるにしても315~350ドルの範囲で推移するものと予想される。